

---

# ナミノート NAMI-note

波崎ナミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナミノート NAM I - note

### 【Nコード】

N5562Z

### 【作者名】

波崎ナミ

### 【あらすじ】

「ラノベ版『バクマン。』を目指そう。ボクたち二人で」

アマチュア作家・波崎ナミとイラスト担当のまりんは、自作の小説サイト『NAM I - note』でライトノベルを掲載していた。

高校進学後、初めて顔を合わせた二人は文芸部を設立し、『NAM I - note』のコンビ同時デビューを目指す。

ナミの初恋、まりんの過去、デビューと挫折。

一緒に過ごすうちに、二人の関係にも変化が起き始めて……。

目指すはライトノベル版『バクマン。』！  
高校生作家とイラストレーターのコンビが紡ぐ、サクセスストーリー  
！！！！

## 「non title」(前書き)

週刊少年ジャンプで連載中の人気漫画『バクマン。』、最高です。主人公が最高なだけに。

大好きな作品を目標に書いてみます。

二次創作ではありません、ごめんなさい…

現実はこの話のようにうまくはいかないでしょうし、作者自身は作中の主人公ほど文章が上手ではありません。が、夢見ることも大切でしょう。…たぶん。

『不定期更新』になりますので、ちゃっっちゃか読みたい方、ご容赦を。

また、誤字脱字の指摘や感想、評価など、どしどしお待ちしております。ます。

## 「non title」

その出会いは偶然だった。

五月、ゴールデンウィーク最終日。就活を一休みして、大学四年生の柚木文音（ゆきのふみ）は朝からパソコンの画面に向かっていた。

昨日、買いだめしてあった小説や漫画をうっかり全て読み切ってしまったのだが、外はあいにくの雨だ。出かけたくない。そのため「たまにはネットもいいか」と小説サイトを片っ端から渡り歩いていたのだった。

規模が大きな投稿サイトでランキング上位の作品を速読で読みあさった。高評価を得ている作品はやっぱりおもしろい。だが、サイト全体で「主人公チート」「異世界トリップ」「転生」が目につく。そうなるどれも似たり寄ったりな感じがしてきて、文音はそのサイトを離れた。恋愛ものとか読みたいな。

検索欄にキーワードを打ち込む。「ネット小説」「恋愛」「おすすめ」

ランキングのサイトを開き、官能小説を除外して上位からリンクをチェックしていく。

そして、そのサイトにたどり着いたのは昼過ぎ。食後の紅茶を口元に運びながらリンクをクリックすると、運命の出会いが待っていた。センスを感じるトップページにサイト名が表示される。

『NAM I - note』

「ナミノート？」

呟き、マグカップを置いて、文音は『Enter』をクリックした。壁紙が罫線入りのノートに変わる。一番上にサイト名『NAM I - note』、少し下の左側にメニューが並んでいる。真ん中に

は『今月の一枚』と題されたイラストが大きく掲載されていた。何気なく目をやって、息をのむ。

それは、妖精の美少女を描いたイラストだった。

透き通るようなブルーで描かれたロングヘアの妖精　ウンディーネだろつか。裸身を覆うのは水のベールだけだ。澄み渡った水をたたえた池の中に立ち、夜空に浮かんだ満月に向かって両手を伸ばしている。降り注ぐ冷たい月光が透明な水をまとった曲線を伝い落ち、その姿にさらなる透明感と妖艶さを与えている。

透き通るような、水彩画風の絵　。

「きれい……」

思わず心を奪われてしまふイラストだった。ほかにはないのか

左のメニューに目をやると『Novels』の下に『Gallery』がある。だが、文音は小説を読もうとしていたのだったと思いだした。イラストは後で見ればいいか。『Novels』をクリック。

「おっ」

『短編』六作、『連載中』一作、『完結』一作、合計八つのタイトルが並んでいた。その中でも、完結されている一作品が目に残まる。タイトルはルビ付きで、『<sup>ウンディーネ</sup>水妖の初恋』

予想通り『今月の一枚』はウンディーネだったと確信した。透明感のある水彩画タッチの絵　あのイラストがこの作品を題材にしたものだとしたら、きつとこれも素晴らしい作品に違いない。

読んでみたい。文音はむくむくと膨らんでいく期待を胸に、そのタイトルをクリックした　。

文音は感嘆の溜息をつくと、背もたれに身体を預けて目を閉じた。細い指先を目元に伸ばし、長時間液晶を凝視していたために疲れた両目を揉みほぐす。まなじりに溜まっていた涙が一粒、頬を伝い落ちたが、先ほどからずっと泣いているので今更気にはしない。

気がつけば、最後まで一気に読み切っていた。雨天のせいもあり窓の外はすでに暗くなっている。お腹が減っているし喉も乾いた。トイレにも行きたい。今まで生理的な欲求すら忘れてしまっただけ、物語に夢中になっていた。

『NAMI-note』に掲載されている小説の作者は管理人の『波崎ナミ』。彼女の純粹で透明でみずみずしくて、時折きゅっと胸を締め付けてくる切なさがある物語には不思議な？引力？があった。まるでキャラクターの人生を追体験しているかのような、心の深いところに響いてくる言葉の数々がそこにはあった。

そして、その小説に花を添えているイラスト。イラスト担当の『まりん』の絵は、最初に文音が惚れたウンディーネ同様、水彩画タッチの透明感あふれるものだった。

二人のストーリーとイラストは相性がピッタリで、ひとつの優れたライトノベルとして出来上がっていた。

「…………ぐす」

ようやく泣きやんだ文音はティッシュで涙を拭い、もう一度画面を見つめた。最後をしめくくる『まりん』渾身のイラストが映っている。胸にはまだ甘くて切ない痛みが後を引きずっていたが、文音の泣きはらして赤い瞳には、ひとつの決意が揺らめいていた。

この作品は ううん、この二人の作品は全部、もっとたくさんの人に読んでもらうべきよ。

これこそが、柚木文音が編集者を志したゆえんである。

だが、彼女と二人が実際に会うのは、まだ少し先の話。

## 「title 1・入学式」

南校舎一階の廊下には春の日差しが足りず、昼間なのにほの暗い。入学式の活気に盛り上がる学園の中、ここだけ見えない壁で隔絶されているかのようだ。奇妙な静寂に響く足音が、ひとり分だけある。先ほど晴香学園はるかに入学したばかりの佐久間凜子さくま凛子は、初々しい制服姿で保健室に向かっていた。片手に自分の通学カバンを提げ、反対には同級生のものを持っている。入学式の終わりに貧血で倒れた生徒に届けるためだ。

初対面の相手だが、だからこそ担任は凜子を選んだ節がある。田舎ゆえに小・中学校からの顔見知りが多いクラスで、引越してきたばかりの凜子は戸惑っていた。積極的に級友へ話しかけられないままホームルームが終わってしまった、居心地が悪くて早々に教室を出たところを担任に捕まえられた。

「さっき倒れちゃった子、いたでしょう？ ひとり暮らしで保護者の方もいらっしやらないから、まだ保健室にいるの。よかったら、鞆を届けてあげて？」

「え……喋ったこともないのに、ですか」そもそもどんな子が覚えていなかった。「なんであたしが……」

「大丈夫大丈夫！ 入試の時に面接したけど、すごくいい子だったから覚えてるの。佐久間さんも、きつとすぐに仲良くなれるわ」

「……わかりました」

保健室の前で立ち止まると、凜子は一度両手の荷物を床に置いた。ここまで来たのはいいが、やはり緊張する。荷物だけここに置いて帰ってしまおうかとも考えるが、それはあまりに無責任だ。……行くしかない。

凜子は覚悟を決めてドアをノックした。受験の時の面接を思い出



す。若い女性の声ですぐに返事があつた。「どうぞ」

「失礼します」ドアを開け、鞆を二つ持って入る。「一年二組の佐久間凜子です。ええと……名波ななみくんの荷物を届けに来ました」

「きみも新入生か。お疲れ様」

デスクに向かつていた女性が、くるりと丸椅子を回して振り返つた。身体のサイズにぴったりの白衣をまとい、長い脚を組んでいる。理知的な雰囲気眼鏡がよく似合っている、マンガやラノベから抜け出てきたかのような美人養護教諭だ。豊かな胸のあたりに縫い付けられた名札に目が留まつた。

「一之瀬先生、ですか」

「ああ、一之瀬春実だ。二十四歳。スリーサイズは――」

「けっ、けっこうです……」

凜子は両耳を手でふさがぶりを振つた。本人の口から聞かずとも、春実が理想的なプロポーションであることは見てとれる。うらやましい。特にバストとか……。

うらめしそうに自分の胸元を見つめる凜子に、春実は苦笑して言った。「小さいのも需要はあるぞ」

「小さくなんかっ……あるかもしれませんが！　これから大きくなるんです！」

「まあ成長期だからな。余計なダイエットには気をつけなさい」

春実は丸椅子から立ち上がり、ベッドとこちらを仕切っているカーテンに歩み寄つた。薄いクリーム色のカーテンを開けながら呼びかける。「名波。可愛い女の子が鞆を持ってきてくれたぞ」

か、可愛い……！？　「ななな何言ってるんですかあ！！」

「冗談だ佐久間。落ち着け」

「……冗談って……何気にけなしてませんか、それ」

「言葉の綾だから気にするな」

「……うう」

春実は適当に凜子をあしらうとベッドの傍から離れた。「せっかくだから二人とも、少し話したらどうだ？　まだ喋ってないんだろ

う

提案されて、凜子は迷った。クラスメイトと話せるのは嬉しいが、相手は男子生徒だ。こういう特殊なシチュエーションで男の子と話すなんて恥ずかしい。あたしって、なんて自意識過剰……。

凜子は頬が赤くなつてないことを祈りながらベッドを見た。優しい外見の少女が上体を起こしている。少年ではない。？美少女？だ。

「え」

きめが細かく滑らかな肌は、全裸で雪景色に立ったなら見分けがつかなくなるであろう、いつさいの穢れがない、透き通るような白さらさらのショートヘアは色素が薄い。スツと通った鼻筋と薄桃色の唇。華奢な身体は全体の色の薄さも相まって、触れたら溶ける淡雪のような儂さを感じる。

？整い過ぎた？外見の美少女は、眠そうに目をこすりながら凜子のことを見た。髪と同じで色が薄い大きな瞳に視線が吸い込まれる。見惚れて言葉を失くした凜子より先に、美少女が口を開いた。

「はじめまして……だよね」おっとりとした口調で名乗る。「名波ななみ岬さきです」

「凜子、です。佐久間凜子」

「さくまりん……？」

美少女は「んう？」と小首を傾げた。ぼうつと宙を眺めたまましばらく動きを止める。

「名波さん？ どうしたの？」

「……ん。なんでもない。鞆、持ってきてくれてありがとう、佐久間さん」

控えめに微笑んで、岬はベッドの端に腰かけた。凜子はおや？

と思った。岬はズボンをはいている。やっぱり男子なのか。

「どうした佐久間。名波が男か女かわからないのか？」

「え！……いや、そんなことは……」

間違えていたら岬に悪いと思いつつ、本人に確認する。「男の子

だよね……?」

「うん」

正解だ。よかった……。男装の美少女というわけではないらしい。いわゆる『男の娘』なる存在に遭遇したことは驚きだが、ひとまず安心した。

岬は枕の向こうに畳んで置いてあった制服を身につけた。えんじ色のネクタイと濃緑色のブレザーだ。近隣の学校では他に見られない色とデザインなので、凜子は気に入っている。

穏やかな中性的声で、岬は訊ねてきた。「佐久間さんは、どこの中学から来たの?」

「あたしは愛知県から引っ越してきたの。だから、言っても知らないと思う」

「そっかあ。引っ越して、大変だったね」

「……まあね。名波さん　名波くんは?　やっぱりこの辺の出身なの?」

「んー、一応。ここは少し街中だけど、ボクが住んでるのはもっと田舎かな。初めての電車とバス通学だから、結構楽しみ」

照れくさそうに言った岬は、少し表情を曇らせて付け加えた。人が多いのは苦手なだけだね。

しばらくの間、凜子は岬と談笑していた。春実は二人の様子を見守りながら、時々会話に加わってくる。「二人とも、入りたい部活はあるのか?」

「ボクは特にはないです。運動苦手だし……」

「あたしも、部活は別に……」

興味がないわけではないが、今更スポーツをする気にはなれない。春実は「文化部はどうだ」と訊いてきたが、凜子は首を左右に振った。

「絵を描くのは好きですけど、美術部じゃ自由に描けないから」

「うちには漫研もあつたらう？」

「マンガも別に……ちよつとは興味ありますけど。一枚絵のイラストの方が好きだし……」

「ふうん。名波は興味がある文化部はないのか？」

「部活はあまり入る気がしなくって……。本は好きですけど、この学校って、文芸部がないじゃないですか」

「あつたら入部するの？」

そう訊かれると、岬は困った様子で形の良い眉を下げた。「わかんないです」

「本とかマンガは家で読めばいいし。ひとり暮らしだから、家の事もしなきゃいけないし……」

「高校生でひとり暮らしは大変だな。名波は女の子っぽいから、スニーカーや強盗には気をつけなさい」

「あはは……それ、お姉ちゃんにもよく言われます」

凜子は、岬がひとり暮らしだと担任から聞いていたのを思い出していた。食事も自分で作るのだから。壁の時計に目をやって心配する。「もうお昼だけど、時間は大丈夫？」

「えっ、うそ」岬も時計を振り返って、立ち上がった。「ご飯の準備してないよ……どうしよう。買って帰っても遅くなっちゃうし……」

岬は急にあたふたとしだした。凜子がお喋りに夢中になり過ぎたことを申し訳なく思っていると、春実がそつと声をかけてきた。「佐久間は昼食の用意あるか？」

「ないです。帰りにどこか寄ろうと思ってるんで……」

「わかった。おい、名波」

春実は慌ただしく帰り支度をしている岬に呼びかけた。

「佐久間が食事に誘いたいらしいぞ」

「勝手に何言ってるんですか!？」

「? なんだ佐久間。実は嫌なのか？」

「い、嫌じゃないですけど……! なんて会ったばかりの男の子と

……」  
「ぜひとも名波と一緒に食事したいそうだ。せっかくだから、二人でどこか食べにいったらどうだ。ん？」

女性二人のやりとりを不思議そうに眺めていたが、岬は春実に戻事を促されると言った。「いいの？ 一緒にお昼食べにいったも」  
長いまつげに縁取られた瞳に見つめられ、凜子は春実に反論した割にはあっさりと頷いた。

「もちろん。坂の下のパスタ屋さんでいい？ 今朝通りかかったときから気になってて」

「いいよ。ボクも行ってみたいな」

岬は春実に礼を言って保健室を出て行った。凜子はそのあとを追う。

ブレザーを羽織っていても、岬の背中のはか細くて少女にしか見えない。凜子が初対面の相手との食事を了承したのは、おそらくこれが理由だろう。女の子にしか見えないから、異性として意識する必要がある。下手に気兼ねせず話せる。

引っ越し後初めての友達が岬でよかったと思った。

……あ、初めてじゃないか。

もう一人、この辺りに住んでいるはずの友達の名を思い出す。名前といっても、本名とは違うのだが。

。あたしが近くに引っ越してきたって知ったら、驚くだろうなあ。

早く連絡を取らなければならない。『NAM I - n o t e』の小説担当にして相棒・波崎ナミに。

「title1・入学式」(後書き)

家庭研修ひょうほう!!

「title 2・正体」

凜子は岬と連れだって晴香学園正門を出た。自分たちと同じ新入生で混み合うバス停を通り過ぎて、それなりに急な下り坂を歩く。身長は凜子の方が低い、岬は歩くのが遅いので彼のペースに合わせて歩幅を小さくしている。

体調が良くはないせいか岬は少しふらふらと歩いていて、隣で見ている危なっかしい。大丈夫かな。

内心気にかけていると、野球部やバスケット部の寮の前に差し掛かったところで、並列で走るママチャリが後ろから追い抜いていった。背筋にひゃつとした感覚が走り、凜子は岬の手を引いた。「こっち寄って」

岬は心配されていることになど気付かないようだった。「どうしたの……?」

凜子はほぼノーブレーキで坂を下っていくママチャリたちを指さして言った。「あんな風に、歩道でも平気とばす人たちがいるんだから、気をつけなよ」

「んー? ほんとだ、危ないねー」

のんきな反応を受けて、凜子は声に出さずに突っ込んだ。自転車の抜かれたのに気づいてなかったの?

ぼくっと空を見上げながら、たいして興味もなさそうに岬が呟く。

「ねえ」

「……何?」

「手、ちよつと痛いかも」

「……ツツ!? ご、ごめんね名波くんっ」

凜子は握りしめていた岬の手を慌てて離れた。見計らったようなタイミングでまたママチャリに追い抜かれ、とっさに岬を引き寄せせる。後ろを振り返って安全を確認した後、岬と左右を入れ換わった。凜子が車道側に立つ。

右手にはまだ岬の手の感触が残っている。さっき保健室で聞いた話では、岬は運動が苦手だという。普段、スポーツなどしないのだから。岬の手は細くてしなやかで、肌は滑らかだった。

手を握り続けていたのは自分のせいじゃない　と凜子はひそかに抗議した。名波くんが女の子みたいだからいけないんだ。

異性として意識しづらい。そのうち慣れるのだろうか、凜子ははなはだ疑問だった。

そういえば、異性間の友情は成立するんだっけ……？

徒歩には少し長く思える坂道が終わると、大きな交差点にぶつか。目的の店はすぐ左手だった。看板によると生パスタがおすすめらしい。近くの高校生を狙ってか、価格もリーズナブルだった。

店内に入る前、凜子は岬を気にかけて。「大丈夫……？」

坂道を歩くのは足に負担がかかるが、ここまで来るのはそれほど疲れることではないはずだった。しかし、岬は端正な顔に疲労の色をにじませている。膝もぶるぶると震えていた。

「ん……ただの運動不足だから、平気。早く中に入ろう」

ドアを開けるとチーズやトマトソースの香りが鼻孔をくすぐった。香ばしいパンの香りもする。

平日とはいえ昼食時なので、席はあらかじめ埋まっていた。晴香学園の制服もちらほらと見受けられる。親が入学式に来たらしく、両親と食事を共にしている者もいた。凜子の両親は仕事が忙しくて見に来れなかったので、少しだけうらやましい。

そういえば岬はひとり暮らしだった。窓際の禁煙席に座ると、メニューを開きながら訊いてみる。

「名波くんってひとり暮らしなんですよ？　ご家族は？」

「え……？　ああ　「岬は困ったように微笑んだ。「お父さんとお母さんは、だいぶ昔に死んじゃった。今の家にはお姉ちゃんと住んでただけけど、お姉ちゃんは大学と仕事で東京に行っちゃって…



…」

「……そうだったの……。ごめんね、変なこと訊いて」「んーん。変なことじゃないよ、家族のこと訊くのは」

注文した料理を待つ間に、岬は自分の姉について語った。頭が良くて東京の国立大学に進学し、ミスコンで優勝したのだとか。姉について喋る岬はこころなしか口調が早口になっていて、声のトーンが高い。白い頬は健康的な赤みを帯びている。

「名波くんは、お姉さんのことが好きなんだね」

「えっ」ストレートな質問に恥ずかしがりながらも、岬は今日一番の笑顔を見せた。「うん。好きっていうか、すごく大好き」

二人は主に、互いの趣味について話しながら生パスタを食べた。

岬は歩くのと同様に食べるのも遅かったので、岬についてたくさんのことを知れたし、逆に凜子のことを知ってもらえた。一緒に食事するよう勧めてくれた春実に感謝する。

「ごめん。ちよつとお手洗いに」

デザートのプディングを残して、岬がトイレに立った。凜子は用事を思いだし携帯を取り出す。そろそろスマホに変えようか。

メールを打つ。相手は『波崎ナミ』 小説サイト『NAMINote』で、『まりん』こと凜子がイラストを提供しているアマチュア作家だ。中学二年の三学期からだから、彼女と組んで一年とちよつとになる。だが、実際に顔を合わせたことはまだない。住む場所が離れていたし、二人とも行動力があるほうではなかったからだった。

ナミは相当な速筆だが、更新はまりんがイラストを描くペースに合わせている。また、今では継続的にサイトを訪ねてくれる読者を確保するため、短編よりも連載小説に力を入れている。

凜子は件名を打ち込んだ。『重大発表!!』

『こんにちは、まりんだよ。実はナミちゃんに大事な話があるの。あたしね、最近引越したんだよ。どこだと思う?』

驚いたナミの返信を想像して、思わずほほを緩ませて続ける。

『ナミちゃんが住んでる近くなんだよ。晴香学園に通い始めたの!』

メールを送信したところで岬が戻ってきた。時を同じくしてバイブの音が聞こえる。返信にしては早いと思ったら、岬のスマートフォンだった。

「やっぱりスマホって便利?」

「ん? どうだろ。あまりこだわりないから、わかんない」

「ゲームとかしないの?」

「やったことないかなあ。お姉ちゃんが大学行きながら稼いでくれるんだから、なるべくお金かけたくないし。これからはバイトもしなきゃ」

「バイトかー……あたしの友達も言ってたな。『高校入ったらバイトする』って」

この友達とはナミのことだ。更新のペースに影響はないから気にしないでいいと言っていたが。

着信はメールだったらしい。岬はふっと画面を一瞥すると、すぐに鞆にしまった。もう読んだのか、それともいたずらメールの件名を見てスルーしたのか。

「ふふ」

岬は笑っていた。

片頬に手を当ててテーブルに肘をつき、微笑んでいる。色素の薄い大きな瞳が上目づかいに凜子を見つめていた。「……何? 顔にソースついてる……?」

「うっん。そうじゃなくて なんて例えればいいかな」細長いスプーンでプディングをつつきながら、岬は言う。「たとえば『推理小説を読んでいて、自分の推理通りの展開と結末だった時』みたいな、嬉しさ……? かな」

「？ 共感できなくもないけど、何その例え。前に友達も同じこと言ってたけど」

と、そこまで口にして、凜子はひとつの可能性に気付いた。まさか、そんなことあるわけ……。

だって、いくら近くに引越してきたといっても、

この市には政令指定都市に認定されるだけの人口が存在している、

高校なんて周辺にいくらでもあって、

その高校にもたくさんクラスのクラスがあるんだから、

たまたま親しくなった男子生徒が『彼女』だったなんて、想像しようがない。

凜子は頭を駆け巡った推測に茫然と呟いた。「ナミちゃん……？」  
対する岬は、ただ穏やかに微笑んでいる。女の子にしか見えない少年に向かって凜子は繰り返す。

「名波くんは、ナミちゃんなの……？」

「んっ」

柔らかなショートヘアを揺らして、岬が小首を傾げた。凜子はそれを肯定のサインだと思った。

「改めてはじめまして、？さく『まりん』こ？さん」

「ボクが波崎ナミだよ」

「title3・文芸部」

「……んっ、ふ……は……はあ」

決して広くない部屋に、岬のあえぎ声が響いていた。岬は息苦しそくに大きな目を細め、長いまつげが夕陽を受けて影を落としている。女の子にしか見えない？ 整い過ぎた？ 顔を見つめて、凜子が申し訳なさそうに呟く。

「いきなりごめんね、岬……痛いところ、ない……？」

「……平気、だけど……こんなの、はっ……はじめて、だったから……」

「……ごめん」

わずかにオレンジがかった光が窓から差し込んでいる。二人きりの空間は、春の日差しに満たされて暖かだった。充分過ぎるほど火照った岬の身体には少々室温が高過ぎる。細い首筋を一粒の汗が伝った。不規則に乱した息を抑えつつ、岬は懇願する。

「頂戴……？」

「うん。いいよ……」

自分の欲求を我慢しながら、凜子は

時は少しさかのぼる。

帰りのホームルームが終わると、運動部に所属している生徒たちは一斉に教室を飛び出していった。一年生は部活の準備を任されるから大変だろう。もっとも、スポーツなど体育の授業以外では縁のない名波岬には、まったくの他人事なのだが。

運動部たちがいなくなった教室には、のんきに荷物をまとめている文化部と居残ってノートを広げる生徒たちがいた。居残りに備えて購買へ買い出しに行くグループもいる。

岬の動きは相変わらず緩慢だった。隣の席に座っている眼鏡の少年と話しながら、教科書とノートを鞆の中に移している。

眼鏡の少年　羽淵が言った。「岬は部活いかねえの？」

「行くよ。でも、凜子もまだお喋り中だから。ボクもハブツチと喋っていいんだよ」

「ふうん」

羽淵良平は、岬が中学生のころからの馴染みだ。不健康そうな痩身で、へらへらとした軽薄な笑みをいつも顔に貼り付けている。誰とでもそこそこ仲が良く、そのくせ休日は家に引きこもりパソコンにかじりついている情報通だ。

「佐久間って愛知から越してきたんだろ？　うまく馴染めてよかったじゃねえの」

「だね」

入学式から三週間が経ち、四月末。この頃になるとクラスの中でもグループ分けがほぼ完了している。同じ小・中学校出身者を中心に集まっていく中でも、凜子はうまく溶け込めていた。容姿は可愛いし、それを鼻にかけた様子もなく、性格が良いからだろう。初めは心配していたが、取り越し苦労だったらしい。

ちらと斜め後ろを振り返ると、凜子は今も級友と何やら盛り上がっていた。顔を赤くして両手をぱたぱたと振っている。「そそそつ、そんなことないよ!」

岬の視線を追って顔を上げた羽淵がぼそつと言葉を漏らした。「佐久間って可愛いよな」

「ん。そういえば、ハブツチは小さい子に興味があるんだっけ？」

「ロリ?でも?イけるっただけだ。俺はストライクゾーンが広いんだよ。だいたい佐久間は同い年だから?合法?だ」

「合法かどうかはわかんないけど……」

佐久間凜子は小柄な女の子だ。さすがに小学生には見えないが、中学生だと言われれば信じられる。

同い年の少女たちの中においても、背丈は頭一つ分近く小さい。ボ

デイラインの凹凸は控えめで顔立ちも幼い。本人は気付いていないかもしれないが、ツーサイドアップにした髪も子供っぽさを助長させている。

ふいに凜子がこちらを振り向いた。と思つたら、どたばたと机の間を駆け抜けてくる。

「岬！」凜子は童顔を真つ赤にして訊ねてきた。「あたしたち？友達？だよね！？」

「？ん。友達だよ？どうかし」  
「ほらあ！岬も友達だつて言ってるでしょ！別に変な関係なんかじゃないもんっ！」

ぷくうつと頬を膨らませて、凜子は友人らに訴えた。にやにやと見つめ返される。「はいはい。そんなに怒らないでよ凜子。怒っても可愛いけど」

「……………ううう」  
凜子はますます顔を紅潮させて、湯気がたつているように見間違えるほどだった。あわあわと口元を震わせるが、言葉は出てこない。やっぱり恥ずかしがり屋だなあ……………

「ばか　　つつ！！」

「ふえっ？　ちょ……………」

凜子は岬の手首を掴むなり猛然と走りだした。自分の席を経由して鞆を取り、廊下に飛び出す。女の子たちが笑つて言った。じやあね、新婚さーん。

こうして岬は凜子に手を引かれるまま廊下を走り、階段を駆け下りて、文芸部部室に転がり込んだのだった。

「んぐ、ん……………ふは。あー、つかれたあ……………こんなに走つたの初めて」

ダッシュなんて久しぶりにした岬は、凜子からもらったカルピスウォーターをボトル半分ほど飲み干してしまった。白く濁った液

が一粒、口の端から滴っている。

「ごちそうさま。けっこう飲んじゃった……」

「いいよ別に。その……あんなに取り乱したあたしが悪かったんだし」

軽くなったペットボトルを受け取ると、凜子は床から立ち上がった。窓際にふたつ向かい合わせて置いてある席の、いつも使っている方に座る。しばしためらうように飲み口を見つめてから、カルピスを一口飲んだ。横顔が赤いのは走ったせいかな、それとも夕陽のせいかな。

「岬はカルピスウォーターのCM知ってる？」

「んー？ 最近見ないけど……確か『カラダにピース』ってやつでしょ？」

「そ。『好きだー！』ってやつ」

「それがどうしたの」

「さつきさ、みんなと話してたら……そのう」凜子は一度言葉を詰まらせた。「あたしと岬が……付き合ってるんじゃないかって、訊かれて」

「あぁー……」

岬はようやく全力疾走させられた理由を知った。なるほど。岬も時々真偽を訊かれる噂話だが、凜子は恥ずかしさに耐えきれなかったらしい。

凜子は小さな身体をさらに縮こまらせて問ってくる。「あたしたち、付き合っていないよね!？」

「ん。ただの文芸部で、ただの仕事仲間」

「……だよ……」

凜子はほうつと溜息をついた。なんとなく残念そうに見えたのは気のせいかな。

「んしょ」

プルプルと小刻みに震える膝に力を込めて、岬も床から腰を浮かせた。凜子の正面、ノートパソコンが置いてある席に着く。今日も

『NAMI-note』で連載中の小説『パーフェクト・スケッチ』の続きを書かなければならない。

入学式の日、先に相手の正体に気付いたのは岬だった。彼女の名前を聞いた時点で、凜子が『まりん』である可能性に思い当たった。その後の会話で趣味が『まりん』と同じであることを知り、最後に届いたメールで確信した。

『あたし、ナミちゃんはずっと女の子だと思ってたのに……』

波崎ナミの正体を知った後、凜子は恨めしそうに言っていた。『ボクっ娘じゃなかったの』

岬としては故意に騙しているつもりはなかったし、特に問題は生じなかったので黙っていたのだが、凜子は不服なようだった。おかげで機嫌を取るのに苦労したが、余談である。

誤解が発覚しながらも、かくして初面会を果たした二人は、場所を近くの公園に移して話し合ったのだった。せつかくこんな偶然に恵まれて、同じ学校に通うことになったのだから、一緒に作品を作ろうと。

『せつかくだから部活作ろうよ』と凜子が言った。『「ラノベ部」！』

『それは平坂読先生の作品でしょ……MF文庫J』

『じゃあ普通に文芸部！うちの学校にはまだなかったよね』

『けど、別に部活がなくなっただって小説は書けるし……』

予想外の出会いに興奮していたのは岬も同じだったが、創部までしなくてもよいのではと乗り気ではなかった。そんな岬に向かって、まりん もとい佐久間凜子はかつてない強気な態度で言い切った。

『作るったら作るの！わかった？岬？！』

凜子から初めて呼び捨てにされた。

『「ラノベ版？バクマン。」って言ったのは、岬でしょっ！』



そもそも『バクマン。』の二人は部活なんてやってなかったけど、なんてことは岬も言わなかった。家が離れている二人には、一緒に活動できる場所がある方がいいのは事実だったし、岬は部活をしたことがなかったから少し興味があった。

こうして岬たちは文芸部を設立することと相成った。美術室横の大きめの資材室を部室に借りて、机と椅子は空き教室から二人分だけ持ってきた。

部員は岬と凜子の二人だけだったが、特に勧誘は行わず、他の部活のように宣伝のチラシを描くこともしなかった。ここは『NAM I - n o t e』のための文芸部だから、無理に部員を増やす必要はない。入りたい人がいたなら、自分から入部を申し込んでくれたらいい。

直接会ってから一カ月ほどしか経っていないが、二人の間にぎこちない雰囲気はなかった。最初こそメールのやり取りとのギャップに違和感があったものの、順調に創作に取り組めている。

「ねえ、凜子」

「……………何？」

『今月の一枚』の下絵に没頭していた凜子は、一拍置いて視線を上げた。岬はその手元を見やり、感心する。まだ下絵だが、相変わらずうまい。

「今回もクオリティ高いね。さすが『まりん』」

「まあね。今回は一つの節目だから、とっておき」

下絵には、写真からイラストを起こした岬と凜子が描かれている。それから、『水妖の初恋』と『<sup>ウンディーネ</sup>パーフェクト・スケッチ』のヒロイン。『文芸部設立記念!!!』の文字もあった。

凜子とライトノベルを作り始めた時を思い出した。

「ねえ、凜子」

「今度は何？」

「ラノベ版『バクマン。』を目指そう。ボクたち二人で」

「……はあ。何回同じこと言うのよ、ばか。それでも作家の端くれ？ もっといい言葉を見つけないさい」

岬はお姉さん気取りで指摘する凜子に苦笑した。「はあい。最高のお話を書くから、任せて」

目指すは二人同時の新人賞入賞、そして『NAM I - note』のコンピでの書籍デビューだ。

「titles」文芸部「後書き」

我ながら筆が遅い…

「作中作品紹介1・パーフェクト・スケッチ」 (前書き)

作中では名前だけしか出てこなかったりなので、ちょっとずつ紹介  
したいです。

あらすじとかささいな裏設定くらいですが。

あとあと繋がりがあつたりなかったり…

## 「作中作品紹介1 パーフェクト・スケッチ」

題：パーフェクト・スケッチ

作：波崎ナミ 絵：まりん

「被写体があまりに完璧すぎると、画家の技術が劣って『本物以上』を表現できない」

あらすじ：

美女を描くことに青春を燃やす美術部員・景渡は、ある日『完璧な容姿』を持つ美少女・美姫みきに出会う。発作のように美姫の姿を描く景渡だが、スケッチは満足のいく出来ではなく、美姫の親友である咲良さくらから変質者として目の敵にされる始末。

しかし、美姫のことを諦めきれない景渡は、彼女が廃部寸前の保育部に所属していることを知ると美術部と保育部を掛け持ちする。だがそれは美術部の後輩・凧子たここの反感を買い、景渡の保育部からの退部を賭けて勝負することに。

凧子たここが突き付けた勝負は、地区の夏祭りで展示する絵を同じ題材で描き、どちらが票を得られるか競うというものだった。

題材は『高校生活』

景渡は保育部存続のため協力を申し出た美姫を被写体にするが、途中で大きな壁にぶつかって。

作品情報：

『NAM I - note』二作目の長編小説。連載中。

ナミが中学生の時、美術教師の『美』に対する自論を聞いて思いついたもの。

絵画の知識や技術についてはまりんに取材している。

## 「title 4・初仕事」

夕日に満たされた部室の窓辺、向かい合わせの二つの席。

苦笑しながらも岬は幸せそうだった。「最高のお話を書くから、任せて」

「おもしろそうですねー！」

『NAMI-note』の更なる進化を誓う声に続いた少女の声は、凜子のものではない。

唐突に開け放たれたドアから、生徒が男女一人ずつ入ってきた。男子生徒には見覚えがある。というかクラスメイトだった。針金のような痩身と眼鏡、にやにや笑いが特徴の情報通。岬と一緒にいるのをよく見かける。

「よう、お二人さん」クラスメイトの羽淵良平はいつも以上の薄ら笑いと言った。「お取り込み中だったかな」

岬がキーボードを打つ手を止めた。「そんなこともなくはないけど……なんでハブッチが文芸部に？もしかして入部希望？」

「はっ、まさか。俺はただ、文芸部に連れてってくれて頼まれただけさ。っで、ご覧の有様」

羽淵は同行者の細腕で首を絞められていた。男とはいえ羽淵は相当細い。その首をへし折らんばかりに力を込めて、ボブカットの少女が連行してきたらしい。羽淵のにやにやがいつもより酷いのは女子生徒の胸が頬に押し当てられているせいなのか。

「……その人は？」

凜子は穏やかな空気を破られたことに気分を害していた。すねた顔で首絞めボブカットを見据えている。一方、睨まれている側は大変機嫌が良さそうだ。

「はじめまして、文芸部のみなさん。あたしは新沼喜々（にいぬま

きき) つていいいます」

「あたしが何の用で来たかっていいいますと実は新聞部の取材でしてしかしなせ部長であるあたし自らがここまで足を運んだのかといえはですねえ五月第二週発行の校内新聞に部活紹介を載せるため各部に記者を送り込んでいますけど新設されたばかりの文芸部は最初取材リストから漏れていたせいで人手が足りなくて仕方なく総指揮官であるあたしくしめが現場に駆け出されることと相成ったわけですよええまあこんな可愛らしい美少女たちをお目にかかれたんですから全然構いませんけどぐへへへえ」

「要約してください!」

止まらないマシンガン・トークにたまらず凜子は声を張った。おびえる岬を後ろにかばって仁王立ちし、よだれを垂らして接近しつつある喜々の正面に立ちはだかる。こんなおかしな人を岬に近づけてはいけない。

「……むう。心配しなくても食べたりなんかしませんよ」喜々は両手を挙げてひらひらと振る。「つていうかあたし三年生だし? 別に敬語じゃなくていいよね? いいんだね。おっけーブラジャー」  
「げほつごほ……なかなか素敵なお姉さんだろ?」

ようやく解放してもらった羽淵はせき込みながらも口の端を吊り上げた。マゾの気があるようだ。

「素敵かどうかはともかく」凜子ははまだ警戒を解かずにいる。「用件はなんですか?」

「そんなにツンツンしないでよう。ね? 後ろで震えてるきみも、怖がらないで」

「用件は?」

「……はあ。一応さつきも言ったんだけどさ、あたし新聞部の部長なの。つで、あなたたち文芸部の取材に来ました」

二の腕に着けた『新聞部』の腕章を見せられて、凜子はうなった。



「取材？」

喜々が言う。「部活紹介の記事を書くの。新設したばかりで部員少ないでしょ？ 宣伝にもなるよ」

凜子は岬を振り向いた。岬は戸惑いの色を顔に浮かべている。あたしも同じ表情をしているのだろう。

凜子も岬も、これ以上の部員はいらない。入りたいと言われれば拒まないが、こちらから誘いはしない。二人はこのことを喜々に伝えた。

岬が控えめに言った。「だから、申し訳ないですけど……ボクたちの記事は書いてもらわなくていいんです。わざわざ部室まで来てもらったのに、すみません……」

「いやいや、そんな謝らなくても」羽淵のにやけ癖が移ったのか、喜々はにぱつと微笑んだ。「まだ話は終わってなくてね。もうひとつ、あるんだ。今度は依頼なんだけど」

「依頼？ ですか……」

「そ、依頼。お仕事の」

一瞬のことだったが、喜々がスウツと息を吸い込んだ。凜子はなんとなく直感した。またか……。

「まあ仕事でいっても水商売じゃないから安心してよそもそも薄汚い男どもにきみらをくれてやるくらいなら二人まとめてあたしがお持ち帰りしてやんよジュール……脱線しかけたけど話を戻すねええつと何だっけそうそう依頼だよ小説の依頼！」

「本題を言うまで長いですね」

「よく言われるよん」

凜子の眩きを気にした様子もなく、喜々はポケットからくしゃくしゃになった紙切れを取り出した。ほら、これ　と向かい合った机の境に置く。興味を持ったらしく近づいてきた羽淵が歓声を上げた。「へえ！ 校内新聞に小説を載っけんのか。ちよつとすげえじ

やん」

紙には『締切…GW明け 短編(?)』とある。凜子は思った。全校生徒に配布される校内新聞に小説を掲載してもらえれば、そこで獲得した読者に『NAMINOTE』も閲覧してもらえる可能性がある。これはチャンスだ。

「ね、岬はどう思う? これ」

「んー……。あろう、喜々さん」

「なあに?」

「短編の後に(?)ってあるんですけど……短編じゃなきゃダメですか……?」

「と、いうと?」

「連載小説を書きたいんです」岬はパソコンの画面を喜々に見せた。「こういうのを考えてあるんですけど……短編じゃなきゃダメですか?」

画面にはメモ帳が表示されていた。一番上にタイトルがある。凜子も初めて見る題名だった。

『LOST GIFT』

喜々があらすじを読みながら言った。「確かに……これは連載向けだよねえ。うーん……」

天井を見上げて腕組みした喜々に、岬が不安そうに訊く。「おもしろくなさそう、ですか……?」

「いや」喜々は即答した。「あたしは好きだよ、こういうの。内容も中高生向けだと思う」

喜々は賛成の意を示しながらも、「ただね」と続けた。

「ただねえ……漫研の反対に遭いそうなんだよね、長期の連載つてなると。今回小説をお願いするのはさ、次の号に載せるはずだった漫研の作品が間に合いそうもないからその穴埋めに、って目的だから。連載になると漫研のスペースを削ることになっちゃうし、もめ

「そうだなあ」

「……………そう……………ですか。すみません、わがまま言っちゃって」

岬は儂げな微笑を浮かべた。残念がる相方に自分も気を落としたとしても、凜子は思わずくらくらとした。可愛い……………どうして岬は男なのだろう。

精神攻撃を受けたのは喜々も同じようだった。呆けるように開いた唇の端からよだれが滴り落ち、ようやく固まっていたことに気付いたらしい。ハツとしてポケットからハンカチを取り出している。

「おっ、お姉さんに任せなさいっ、岬くん！ 凜子ちゃんも！」

喜々はハンカチで口元を拭くと、向かい合わせの机に身を乗り出し、何事かと驚く二人の顔を交互に見やった。

『『LOST GIFT』が校内新聞で連載できるように、あたしが手伝ってあげる！ 部長権限で、ね』

## 「titles・GW三日目」

ゴールデンウィーク三日目。岬と凜子は部室に集まり、それぞれの作業に没頭していた。窓の外からは野球部の威勢のいい掛け声が聞こえてくるが、聴覚から完全にシャットアウトされている。止まることなく鳴り響くタイピングの音は、さながらルロイ・アンダーソンの『タイプライター』のようで、文芸部の作業用BGMになっている。

いま岬が物語を書き、凜子がイラストを描いている作品は『LOST GIFT』。新聞部部长・喜々のささやかな権力だけでごり押しすることはできなかつたが、反対派には『NAM I - note』に掲載している作品を見せて承諾させたのだった。

漫研の反対は充分に予想されるが、それでも新聞部から許可が下りたのは岬たちの作品の方がクオリティが高いと見なされたからだ。自分たちのせいで枠が減ってしまった漫研のためにも、よりよい小説を書かなければならない。

すでにプロットは完成していて、USBメモリにコピーして凜子と新聞部に渡してある。もちろん自分の手元にもあるが、あまり必要はない。第一部完結までの流れはすべて頭に入っているからだ。アニメーションに変換して脳内で再生しつつ、それを文章で表現していく。

赤鬼の剛腕が打ち下ろした金棒を見上げて、野々宮は薄ら笑いを浮かべていた。「わりい、みんな……」

野々宮の最期の言葉は身体ごと押しつぶされ、けんげき剣戟の最中である

遊里には聞こえなかった。地響きと、バキゴキという破碎音でようやく気付き、横目に見やる。そこでは、数瞬前まで快活な野球少年だったモノが大地にのめり込んでいる。

うえ……と酸っぱいものが喉にこみ上げてきた。刀を握っていた両手から力が抜けて、膝がガタガタと震えだす。動きを止めた遊里に構うことなく、青鬼は無造作に蹴りを放った。

「ぐふっ」

武骨なつま先が無防備な腹に突き刺さり、遊里は大きく弧を描いて吹き飛ばされた。手元を離れた刀はアニメのように地面に突き刺さる。ビクビクと痙攣しながら吐しゃ物をぶちまける遊里に、今にも泣き出しそうな愛紀が駆け寄ってきた。「反町くん！」

「ツツ……卯月さん……逃げて……」

「反町くんも一緒に」

遊里は愛紀に助け起こされた。自分も血と吐しゃ物で汚れてしまふのを気に留める様子もなく、愛紀は華奢な身体で懸命に遊里を運ぼうとする。「今日はもう終わりよ。がんばって」

無理だ……。遊里は混濁した意識の片隅で思った。僕はここでゲームオーバーだ。

ドンっ　と強く突き飛ばすと、愛紀は状況を理解していなかったらしく、え？　とこちらを振り返った。だが、彼女と視線を合わせる前に、遊里の身体を衝撃が揺さぶった。野々宮を殺した赤鬼に、金棒で右半身を殴打されたのだ。

全身が揺れる　身体中の内臓が、脳が揺れ、かすかに繋ぎとめていた覚醒の糸が途切れる。

「反町くんツ……！！」

愛紀が悲鳴を上げたようだった。きりもみして無様に落下し、野々宮だった血だまりに転がった遊里は、暗く閉ざされていく視界に愛紀の姿を映していた。何してるの、きみは逃げてよ……。

意識を失う寸前、愛紀が遊里の刀を振りかざしたように見えた。

タタンツ　と最後の『。』まで勢いよく打ち終えて、岬は長い溜息をついた。校内新聞用に文章をいつもより削らなければいけないから難しい。椅子に背中を預けて天井を仰ぎ見た。凝り固まった首をゆっくりと回してほぐす。

『タイプライター』がやんだことに凜子が気付いた。「……休憩？」

「ん。内容的にメンタルがつらくて」

「岬は流血苦手だもんね。あたしもだけど」

「ほんとはボクたち、『文学少女』みたいな話の方が向いてるんだよね……これ、ちゃんと面白いなあ……」

「プロットは面白かったよ。マンガの原作にも使えそうな感じで」  
席を立った凜子が後ろに回り込んできた。パソコンを覗き込んで訊く。「どこまで書いたの？」

「前からちよつとずつ書いてたから、今は三日目のクライマックス。野々宮がゲームオーバーして、遊里も追いつめられる。これから愛紀が『殺し』の才能を發揮すると……」

「……ここ、絵にするの？」

「んー……倒された鬼たちの上で刀を見つめてる愛紀が、目覚めた遊里に気付いて泣きそうになると……あの場面をイラストにして最後に載せたらかつこいいんだけどねー……」

「が、がんばる……」

凜子はむうと唸って、それから画面の文章を読み始めた。頬にかすかな体温を感じてちらりと見ると、本当に同い年か怪しく思える幼い横顔が至近距離にあった。かわいいなあ……妹がいたらこんな感じなのかな。

そんな風に思いながら横顔を見つめていると、不意に凜子がこち

らを向こうとした。反応が遅い岬に反して、凜子は圧倒的な速さで飛び退き不慮の事故を回避する。「なっなっ何っ？ 顔に何かついてる！？」

「んーん。かわいいなって」

「ツツツ……………ばか」

凜子は慌ただしく自分の席に戻るとうつぶせて、パソコンの向こう側に隠れてしまった。

「どうしたの」

「バカ岬！ 小説が好きなら気付きなさいよ」

「照れてるのもかわいいと思うよ？」

「わかってるなら言わない！」

凜子はガタツと椅子を蹴飛ばして立ち上がった。まだ五月になっただばかりなのに、首から上が真っ赤に火照っている。遊里は穏やかに微笑んだ。

「凜子、リンゴみたい」

「……………寒」

「そうかなあ」ギャグセンスの違いに首を捻って、岬は思い出したように言った。「あ、そうそう、それで？ 文章どうかな」

「いつもの一人称じゃないから変な感じ。ちよつと硬くない？」

「だね」

「っていうか三人称だよな？ それ。今までも『ハイエスト・デイ最高の一日』とかで三人称はあつたけど、なんか違う気がする」

さすがまりん 感心しながら岬はうなずいた。彼女の言うとおり、『LOST GIFT』はこれまでの三人称とは少しだけ違う。ちなみに『最高の一日』は昨年度末に書いた小説の略称だ。

岬は鞆から文庫本を取り出した。表紙にはクールな女性のイラストとモナ・リザが描かれている。

「この人の文体を参考にしてみたんだけど、なかなか上手いかなくって」

「……………『万能鑑定士Qの事件簿？』……………？」

「うん。松岡圭祐先生の『Qシリーズ』。キャッチフレーズは『人の死なないミステリ』」

「人が死なない……確かに岬が好きそうだね」

「っん。それでね、ウイキには？一人称的三人称？って書いてあった書き方をしてて 章ごとに人物の視点を定めるんだけど、基本的には三人称で、心理描写では一人称になるっていう……」

「……わかりやすくお願い」

「ええと……たとえばボクの『LOST GIFT』だと、ここ。

『遊里はく思った。僕はここでゲームオーバーだ。』」

「へえ……何かいいことあるの？」

「『Qシリーズ』を読めばわかるけど、読みやすくてテンポがいいんだよね」

まだ今までの癖が抜けきつておらず、目標には遠い。ゴールデンウィーク翌日には喜々に原稿のデータを渡す約束だから、そろそろ第一回目の原稿を完成させねばならない。だが

「もう十一時か……」岬は華奢な腕時計に目を落として言った。「

ごめんね、凜子。ボク、今日はもう帰らないと」

「えーっ？ なんで？」

「お姉ちゃんが帰ってくるから、その準備」

慣れない文体による疲れを忘れて、岬はパツと表情を輝かせた。

うつぶせていた凜子が顔を上げて一瞥し、溜息をついて再び突っ伏す。何事かぼそっとつぶやいた。「……シスコン……」

「？ なに？」

「何でもありませんよーっだ」凜子は身体を起こして「べーっ」と舌を出した。まったく忙しい子だ。

岬は小説を保存し、パソコンを閉じて鞆にしまった。凜子も紙と鉛筆を片付けている。

「凜子も帰るの？」

「何よ。悪い？」

「そうじゃないけど、もう少し描いてから帰るのかと思ってたから」



「だって……ひとりで残ってても、その……寂しいでしょ？」

なるほど。「だね。じゃあ駅まで一緒に行こっか」

岬と凜子は学校前のバス停でバスに乗り、駅に向かった。町の中心部へ向かう人が多いらしく席はほとんどが埋まっていたが、二人とも並んで座ることができた。凜子は妙に身体を縮めて頬を赤らめている。

『LOST GIFT』の展開について話し合いながら岬は思った。お姉ちゃん、凜子に興味あるみたいだったっけ。せっかくだし、紹介しようかな……。

「titles・GW三日目」(後書き)

『Qシリーズ』『千里眼シリーズ』おもしろいですよね。  
伏線ハンパない！

「作中作品紹介2・最高の一日を過ごすために僕がするべきこと」

題：最高の一日を過ごすために僕がするべきこと

作：波崎ナミ 絵：まりん

あらすじ：

ひとり暮らしの高校生・旅人は、いくつもバイトを掛け持ちして生活していた。唯一の楽しみはこつこつ増やしていく貯金だったが、使い道はまだ決まっていなかった。

そんな旅人は二年生のある日、転校生・杏樹あんじゅに一目惚れする。しかし杏樹は大手企業のご令嬢。二人はすれ違ってばかりで一向に進展できない。

だがやがて転機が訪れる。

杏樹の誕生日には毎年晩さん会が催されるため、一度も自由な誕生日を過ごしたことがないという。杏樹の願いを知った旅人は、最高の誕生日をプレゼントすると約束する。

その資金は、今まで蓄えてきた大切な貯金だった。

作品情報：

『NAM I - note』に掲載されている短編小説。恋愛がメインだが、章ごとに視点の変更があるため三人称で書かれている。ナミが初めて書いた三人称小説。

「作中作品紹介2 最高の一日を過ごすために僕がするべきこと」(後書き)

LOST GIFT はまた今度紹介しますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5562z/>

---

ナミノート NAMI-note

2011年12月29日14時52分発行